



戦国時代の日野の歴史

蒲生貞秀と音羽城をめぐる内紛



▲蒲生貞秀像（信楽院蔵）

蒲生家中興の祖と言われる蒲生貞秀。幕府と六角家という二大勢力の中で、蒲生家の勢力基盤を作った武将です。

●蒲生貞秀（智閑）

蒲生貞秀は、応仁・文明の乱（1467年～1486年）や応仁の乱後、幕府が元近江守護の六角氏を攻撃した際、幕府側で蒲生家当主として活躍した武将です。

幕府と六角家が和解し、六角高頼が近江守護に復帰した明応4（1495）年ごろから、蒲生家も六角家に属して行ったと考えられま

す。明応4（1495）年に貞秀は52歳で出家し、智閑と号し、蒲生家は長男の秀行が継ぎ、次男の高郷（蒲生氏郷の曾祖父）を六角家に仕えさせたとされ、六角家との関係を深めて行った様子がかがえます。そのことは、明応6（1497）年に行われた美濃の斉藤家と六角家の合戦で、貞秀は六角方として戦っていることからわかります。さらに、文亀2（1502）年、六角家重臣の伊庭家が起こした反乱でも六角高頼を支持し、高頼を居城の音羽城に庇護して、籠城戦を繰り広げました。このように六角家で

の働きが多くなった蒲生家でしたが、幕府側としての動きもしており、永正7（1510）年には水荊岡山城（近江八幡市）攻めに幕府軍として参加しています。

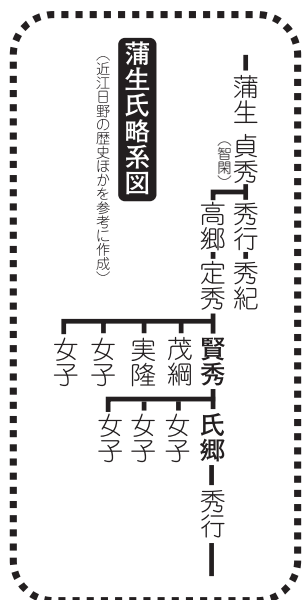
こうして、時の権力者の元で着実に力をつけていた蒲生家でしたが、跡継ぎであった長男秀行が永正10（1513）年に死去し、翌年に貞秀が亡くなると、後継者をめぐって、蒲生家を継いでいた秀紀（長男秀行の子）と高郷の間で家を二分する争いとなりました。

●音羽城の戦い

高郷が六角家に援軍を要請したかは不明ですが、大永2（1522）年7月20日、六角軍2万が、蒲生秀紀の立て籠もる音羽城に対して攻撃を始めました。そして、8か月間におよぶ籠城戦の末、大永3（1523）年3月8日に秀紀が降参し、戦は終結しました。この時、六角家が名城である音羽城を惜しみながらも、破却したという記録が残っています。短い文章ですが、「破城（城の破却）」に関するものとしては、現在国内最古のものとして評価されています。

ています。

さて、音羽城はこの時廃城となり、秀紀はのちに謀殺され、居城を中野城に移した高郷が蒲生家の当主となったと伝えられます。戦国時代とはいえ、同族争いという悲惨な歴史を経て、蒲生家は氏郷へと続く道が開かれたのでした。



▲音羽城遠景